

# アナログ時代の ソーシャルネットワーク

みなみざき  
南崎 啓

●受賞のことは  
本作の舞台になったあの夏から20年、競馬の世界に身を置いて10年の節目を迎え、ふと思い立ち当時の記憶を呼び覚ましながら書いた文章が、皆様の目に触れる場所に辿り着いたことを心から嬉しく思います。騎手を諦めた者が凡そ使ったいい表現ではないかもしれませんが、今回の受賞は馬(題材)の強さに助けられた一言に尽きます。僕は落ちないように必死につかまっていただけでした。

●プロフィール  
1983年生まれ。馬付き一戸建ての家に住むことが人生の最終目標。生活の糧を与えてくれる馬達に日々感謝しつつ、競馬の魅力を多くの人に伝えるべく奔走中。

今はどうかかわらないが、昔のある地域のタウンページには「調教師」という職業欄があった。

僕はどのクラスにも一人や二人いる、テレビ中継を見て競馬に興味を持ち始めた中学生だった。インターネット普及前の当時、テレビや現地観戦以外で競馬の知識を蓄えるには本を読む以外の手段はほぼ存在せず、暇を見つけては近所の図書館で競馬関連の書物を読み漁っていた。

中学校最後の夏休みを直前に控えたある日、とある本で、自分の住んでいる県には二つの競馬場があることを知った。一つは既に知っていたが、もう一つは聞いたことが無い名前だった。地方競馬というカテゴリらしく、何故かはよくわからないが平日を中心に開催しているようだ。馬とファンとの距離が近いのが魅力とある。読んでいくうちに胸が高鳴っていく。

「馬とファンとの距離が近いなら、働いている人との距離も近いはず！」

今考えるとどうしてそうだった、という思考回路だが、妙に高くなったテンションも手伝って、僕は何とかしてその競馬場で働いている人と会いたいと思った。

ただ、繰り返しになるが当時の情報収集の手段は非常に限られており、今ではスマホ一台あれば容易にできしてしまうが、関係者へのアプローチなど雲をつかむような話だった。ひとまず読んでいたその本に競馬場の電話番号が書いてあったのでそこにかけてみたが、休催日だったのか通じない。ならば直接トレセンか厩舎に連絡をしようと、図書館にある他の競馬関係の本や雑誌をくまなく探したが、見つからない。外では陽が傾きかけ、今日はもう諦めようと思ったそのとき、県内のタウンページが一方所に集められている棚が目に入った。載ってるわけがないよな、と思いつつその競馬場がある地域の職業別タウンページを探してきて、

「調教師」の欄を探す。……無い。「調教師」……あつた！ 十人くらい記されている名前の中で、アイエオ順で一番上にあつたアオヤマさんの番号を、館内の公衆電話からダイヤルした。世間知らずで怖いもの知らずの中学生とはいえ、そのときばかりは手が震えていた。

「はいもしもし」

「突然すみません、いま中学校の課外活動で競馬のことを調べてまして、もしよければ厩舎を見学させても

時に起きて簡単な厩舎作業を手伝わせてもらっている、夜明け頃になって先生に馬場に行ってみるか、と誘われた。スタッフのボスの人々に、挨拶はみんなにはつきりとするようクギを刺されていたので、すれ違う人全員におはようございます！ おはようございます！ と連呼しながら追い切りを行うコースまでの道を歩いていると、周囲の人は騎手見習いと認識してくれたのか、わざわざ話しかけてくれる人もいて、僕はすっかり業界に溶け込んだ気分になっていた。

調教後、厩舎に併設する居間のような場所で先生とごはんを食べながら、朝の調教をすっぱかした若手騎手の愚痴なんかを聞いていると、ふとドアが開き小柄な男性がはいってきた。先生と一通りの世間話を交わすと、二人はあるレースのビデオを見始めた。

「やっぱ中央は違いますよ。ゲートからすっごい速いですもん」

「そうやろな」

その男性は先生の厩舎の馬によく乗る現役の騎手で、ビデオはその人が先週他厩舎の馬で中央競馬に遠征したときのものだった。結果は善戦と言っている着順だったのだが、いや、だからこそかもしれないが、その人は時折悔しそうな表情を浮かべながらレースを振り返っていた。

「華やかな世界に見えるやろ？」

二人のレース回顧を邪魔しまいと必死で気配を消していた僕に、その人は話しかけてきた。

「カッコいいやろ？ でもな、」

その人が手のひらを僕の顔の前に出した。

親指が、短かった。サーっと血の気が引いていった。

「調教中にやったんよ。普通に落ちたらよかつたんやけど、指が手綱にひっつかかってな」

「骨折なんてしよっちゅう。あのキレイな舞台の裏は、大変なこと溢れてる」

「生半可な気持ちじゃ務まらないよ」

鋭い目で語るその人を、先生も同じ勝負師の表情で

崩れ、僕を厩舎の中へと招いてくれた。一般住宅でいう庭にあたる部分には、つぼみのできかけた向日葵が植えられていた。

今回の訪問を強引に課外活動として成立させるために社会学習のテーマを「経済動物」に設定した僕は、競馬に否定的な立場からの質問もする必要があった。いま考えるとかなり答えにくく、失礼な質問もしてしまっていたと思うが、先生は常に真面目に回答してくれた。馬のおかげで自分たちが生活できていて本当に感謝していること、馬にレースで頑張ってもらっている分厩舎ではできる限りのもてなしをしていること、中学生にも分かりやすく丁寧に話してくれた。周囲に競馬関係者が全くいない環境で育った僕にとって先生の一言一句が重く、新鮮なものだった。

「また遊びにおいで」

インタビューが終わり、曳き運動中だった現役の競走馬と写真を撮らせてもらっていた僕の目が相当輝いていたのだろう、先生は嬉しそうにそう言って厩舎に戻っていった。

この日をきっかけに、競馬業界に対する情熱が飛躍的に高まっていった僕は、体が小さかったこともあり、騎手という職業に憧れを抱くようになった。とはいえサラリーマン家庭で育った身としては、高校進学が当然の進路である周囲の友人はおろか、親にさえそのこととは言い出しづらく、自分の心の中にしまっておくしかなかったのだが、悶々とした気持ちは一週間と抑えられなかった。僕はあのときの「またおいで」を頼って、タウンページを再び開いた。

二泊三日の厩舎での泊まり込み。先生にはもう少し仕事の内容を見学させてほしい、とだけ伝えていたので、遠い親戚の子がまた遊びに来るくらいに感覚だったかもしれない。ただ僕にとっては自分が競馬業界でやっていたかを見極めるための重要な三日間だった。普段はラジオ体操すらろくに続けられないのに朝二

見つめていた。僕は情けないくらいオドオドしながら黙って聞くしかなかった。窓の外で咲き誇る向日葵とは対照的に、僕の騎手になりたい気持ちは急速にしばらくでいった。

実はこのとき、僕は親に黙って取り寄せていた地方競馬教養センター騎手課程の願書を荷物に忍ばせていた。当時の願書は、卒業後の所属先のことを考えてのことだと思うが、あなたのことを推薦する調教師がいる場合はここに書いてください、みたいな欄が最後にあり、僕が競馬の世界に身を置く覚悟ができたときにはアオヤマ先生に署名をお願いしようと思っ持参していたのだ。

結局その願書には先生の名前が書かれることも、切手が貼られることも無く、実家のどこかに今でも眠っている。

いま僕は事務職として、地方競馬を側面から支える会社で働いている。騎手への情熱が途切れても、競馬への情熱はあの日以降も途切れることなく続いていたのだ。ちなみにその後、高校進学と同時に通い始めた乗馬センターでお前に乗られる馬は可哀そうだと言われたり、就職の際に関係者が受ける乗馬研修で乗馬経験者でありながら、さりげなく二日目から他の経験者と別メニューにされたりと、騎手を目指し続けなくてよかったと思っただけ回数に数えきれない。

あのとき先生は、僕の本当の気持ちを見抜いていたのかもしれない。覚悟を試す意味であの騎手をあの時間に厩舎に呼び、話してもらったのかもしれない。先生が調教師を引退してもう十数年、迷惑かと思いい賀状も送らなくなってしまう、当時の真相は知る由もない。しかし右も左も分からない僕がああ夏に経験した「馴致」があつてこそ、今の自分があるのは疑いようもなく、小さな図書館にあつた一冊のタウンページから繋がっていた全ての出会いと体験に心から感謝している。

